

平成 28 年度第 5 回文系チャレンジ講座を実施しました

平成 28 年度第 5 回文系チャレンジ講座が、平成 28 年 9 月 28 日、「地域を支える「交通」と「暮らし」「経済」の関係を考える」をテーマに大分大学経済学部の大井尚司先生によって行われました。

遠隔配信された大分鶴崎・大分商業・安心院^{あじむ}・別府翔青・臼杵・中津南・大分西の 7 校(158 名)と来学受講の大分・大分南の 2 校(61 名)、合わせて 219 名の高校 2 年生が受講しました。

大井先生は、はじめに受講生に「日々の通学、買い物、旅行、モノの輸送など、「交通」は身近な地域での「暮らし」や「経済」活動にはなくてはならないものです。「交通」が「暮らし」や「経済」にどのように関わっているのかを、九州内の話題も交えながらお話しします。あわせて、経済学と経営学・商学のそれぞれがどのように違うものなのかもお話しします。」と、語りかけました。

そして、経済学、経営学・商学の違いと関係性の説明をしました。経済学とは社会全体の満足度最大化を目的とし、モノやカネの流れの法則性を論理的に思考する学問であるのに対し、経営学・商学は個々の企業・事業主などの満足度最大化を目的とし、その個に関わるモノやカネ、ヒトの流れや動きの仕組みを具体的に考える学問であると説明しました。それぞれの学問は決して相反するものではなく、相互に関連づけて考える必要があります、また文系の学問だけでなく、理系分野も含む幅広い学問の知識を活用して研究をすることが重要であると強調されました。「経済」と聞いても、具体的な学問内容までは理解していない高校生や、また文系には理系の学問は必要ないと思っていた高校生には、新たな視点を与えていただきました。大学では、様々な学問を学び多角的な視点を持って勉学に臨むことが重要であることがわかり、進路を決定する上で大変参考になる話です。

次に、「経済」と「交通」について考えていきました。「学校への通学が全て車だったら?」「皆がネットで買い物をする?」など我々の日常生活における様々な例をあげ、そこから生まれる交通の問題を提示しました。

2015 年 4 月に大分駅ビルの開業と県立美術館の開館があり、賑わっていますが、通勤は 8 割以上、買い物なども 4 割が自動車で大分市内中心部へ流入しています。県内各市町村の大分市への人口移動は、大分市、日出町など増加している所がありますが、別府市、臼杵市、豊後大野市などは減少しています。また、路線バスの年間乗車人数や運行距離は減少傾向を示し、高齢者を中心に外出率も減少しています。大分市郊外の住宅団地の高齢化と若年層の都心回帰が進み、都市機能が都心に集中する傾向が見られます。地域と交通の視点で考えると、移動の可否で「生活の豊かさ」が制約され、経済活動や雇用の循環を妨げることも予見されます。また、震災と交通の関係は大丈夫か、都市内部の道路の整備はどうか、徒歩で移動が可能で公共交通が整備された街が世界標準である中、大分市の中心部はどうだろうか、というような点にも触れました。



夫か、都市内部の道路の整備はどうか、徒歩で移動が可能で公共交通が整備された街が世界標準である中、大分市の中心部はどうだろうか、というような点にも触れました。

このように考えていきますと、自動車に依存する生活の脆弱さ、震災時等に見る生活物資の入手と交通の繋がり、生活支援のための交通・移動の確保など交通と経済活動との関係について考えること、などさまざまな社会経済の問題と交通の問題が繋がることがわかります。そして「経済学の考え方を使って社会全体を見渡し、世の中の仕組みを知ることは重要だ」と、問いかけました。

講義後のアンケート調査では、「総合的に判断して良かった」(96%「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ)、「教員は真剣に取り組んでいた」(98%)、「受講生は授業に意欲的に取り組んだ」(98%)という高い評価でした。遠隔配信については、「音声は良く聞こえた」(98%)、「映像はよく見えた」(95%)という結果がでました。受講生の具体的な声として「すべての年代の人々にやさしい移動手段は何か」「経済学と地理学や交通工学、土木工学との関係に強く興味を持った」など多くの感想が寄せられました。

